

氏名（本籍） ヌマ ノ ユウ シ 沼野雄司（東京都）
 学位の種類 博士（音楽学）
 学位記番号 博音第40号
 学位授与年月日 平成12年3月24日
 学位論文等題目 <論文> 1970年前後における前衛音楽の様式転換に関する分析的
 研究
 -リゲティ、ベリオ、ブーレーズを中心にして-

論文等審査委員

論文審査会（主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	船山	隆
（副査）	“	“	（ “ ）	角倉	一朗
	“	“	（ “ ）	柘植	元一
	“	助教授	（ “ ）	土田	英三郎
	“	“	（ “ ）	野平	一郎

（論文内容の要旨）

本論文は、1970年前後に転換期を迎えたと言われている、前衛音楽の変質を明らかにしようとする研究である。

全体は4つの章からなる。

予備考察である第1章では、モダニズムの先端としての前衛の性格を「過去の否定」「非表象性」「エリート性」という3点にまとめた後に、音楽における前衛様式を、完全な無調と非拍節的なリズム、そして不確定性などによって特徴づけられるとした。また、ダルムシュタット夏期音楽講習会の記録を詳細に調べ、前衛様式の確立をたどった。

記譜法の分析を行った第2章では、必要以上の変化記号が付されなくなったことや不確定的な記譜が衰退したこと、そして簡略記譜が増えていることなどの点で、3人の作曲家の楽譜がおおよそ70年前後に変化を遂げていることを指摘し、この時期に記譜法が象徴的な性格から、徐々に実用的な性格へと変化していることを論じた。

さらに、反復要素の分析を行った第3章では、3人の作曲家の作品にみる反復が、初期の「さみだれ式」のものから、70年代には同音反復を中心にしたダイナミックな動きへと変化を遂げたこと、そしてその際に規則的な拍節が観察できることを指摘した。さらに、これらの反復は「音楽的説話性」を産み出す母体となっていることを論じた。

そして最後の第4章では、70年代を過ぎると12音をセットとして捉える意識が、徐々に緩やかなものになっていること、旋律線の音程関係が全音階的になっていることなどを指摘し、創作における歴史認識が新たな段階に入っていることを論じた。

以上の考察によって、本論文は、1970年代以降における新しい創作の様式を浮き彫りにすることに成功した。